

< 共通論題の企画趣旨 >

## 中銀デジタル通貨（CBDC）のインパクト

一橋大学 関根敏隆

中銀デジタル通貨（CBDC）とは、中央銀行が発行し、デジタルの形態をとる法定通貨のことを指す。これまで人類は長年にわたって紙のお金（紙幣）を使ってきたが、お金の形態がデジタルに変わることになれば、国民の生活を始め、金融機関の経営、中銀の金融政策などにさまざまな影響が出ることが予想される。

CBDC の発行については、昨秋から複数の中銀（カンボジア、バハマ）が正式な運用を開始しており、すでに CBDC は現実のものとなっている。また、中国ではデジタル人民元の発行が間近に迫っているものとみられており、国際的な影響も含めて、そのインパクトに注目が集まっている。さらに、先進国においても、スウェーデン中銀が e クローナの実証実験を行っているほか、欧州中銀（ECB）が今年半ばを目途にデジタル・ユーロのプロジェクトを開始するか否かを決定する予定である。このように、海外での CBDC 導入に向けた動きが広がる中で、日本銀行でも、昨年には CBDC の専門部署を作り、2021 年度の早い時期には実証実験を開始する方針を表明しており、わが国でも CBDC に向けた機運が盛り上がりをみせている。

CBDC の発行は、そもそも、デジタル技術が発達する中で、国民に利便性が高く安全かつ効率的な決済手段をどのように供給するのが妥当かという観点から論じられるべきものである。そうした中で、検討すべき点は多岐にわたる。たとえば、CBDC を中銀が個人などに直接発行するのか、あるいは金融機関を通じて発行するのかといった発行方法の問題や、トークン型にするのか口座管理型にするのかといった通貨のデザインの問題がある。加えて、民間金融機関による金融仲介機能や金融システムの安定性への影響、デジタル・プラットフォーム等々の決済仲介業者による信用創造の妥当性、クロスボーダー取引のあり方、その国の通貨の信認に対する影響など、様々な論点がある。

本パネルでは、CBDC の全体像や論点を示したうえで、中国のデジタル人民元、カンボジアのバコンなどに詳しい専門家から各国の最新動向を共有してもらい、わが国も含めた今後の CBDC のあるべき姿や導入に向けた課題について考察することを目的とする。